

菊池寛「形」読書会(2021.10.16/11.13)レポート集

大藤 渉	おおふじわたる
佐野之人	さのゆきひと
楯谷智子	たてやともこ
田中克典	たなかかつのり
奈原伸雄	なはらのぶお
行武 要	ゆくたけかなめ
鹿 安冉	ろくあんねん
篠原誠司(明孚)	しのはらせいじ(めいふ)
岡部昌平	おかべしょうへい

■菊池寛『形』復習レポート(佐野之人さん)

人間はつねに形なきところを生きている。自分も今・ここも世界も本来形のあるものではない。人間は自分を生きている。しかしその自分を対象化して知ることはできない。対象化されれば、それはすでに現に生きているところの自分(当体)ではない。今・ここも同様である。現に生きている今・ここは、「今は3時25分である」「ここは家である」と言われる今・この当体である。世界すら対象化すれば、それは現に生きているところの世界ではない。対象化できないものに形の在り様はない。

他方で人間は形なしには認識することも行為することもできない。それ故人間は形なきものを恐れる。それを直視することができない。人間がつねに形によって認識し行為しているということは、人間がつねに形なきもの、それ故にどこまでも分からないものに直面しながら、そこから目を逸らしているということである。

ここで私が安心してこのようなことを述べることができるのも、「形なきもの」が形との対立においてすでに形あるものとなっており、「分からないもの」もそうしたものとして「分かったもの」となっているからである。人間は真に形なきものを考えることもイメージすることもできない。その意味で人間にとってすべては形である。

人間はつねに自分、今・ここ、世界(形なきもの)を対象化し、それを自分、今・ここ、世界そのもの以外の内容(形あるもの)で満たし、自分の生きやすいように構成しようとする。こうして常識が形成される。常識はつねに自分にとっての常識である。

実力というものは本来形のないものである。我々が誰かに実力を認めるのは、つねに結果や効果を含めた形を通してである。外に現れた形を通して内に実力を認めるのである。強そうだという外見も形である。何故誰かに実力を認めるのか。人間は内容と形式、内なるものと外なるもの、本質と現象、原因と結果、力とその発現などを分け、つねに後者に対して前

者を真に存在するものとする。外に現れたものについて回るよりは、内なるものを相手にした方が、予想が立てやすく、その方が生きやすいからである。こうして本来形のない実力が、外なる形を通じてそれ自身内面における形あるものになる。こうして内外を問わず、すべてが形となる。

本来の自分に形などはない。しかし人間はそうした形のないものを直視することはできない。形あるもので自分を支えざるを得ない人間にはそうした形のないものは虚無、底無し、の深淵と映る。人間は不可避免的にそうした虚無から目を逸らし、たえず自分以外のもの、自分の存在を支えることになる。それ故自分が生きる上で大切な役割について、自分は実力がある、と思わないわけにはいかない。その実力が他人に、また自分自身に承認されることを願わないわけにはいかない。こうして人間は不可避免的に自らの実力という形あるものに執着することになる。

新兵衛は自分に形を離れた実力があると思っていた。そのことは「あの服折や兜は、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたが、あの品々を身に着けるうへは、われらほどの肝魂を持たないではかなわぬことぞ」という発言にはっきりと表れている。「われらほどの肝魂」というのが新兵衛の認める内なるものにおける形としての実力である。新兵衛はこの実力は黒皮緘の冑と南蛮鉄の兜を身に着けようが変わらぬものであるはずであった。そうしてこの実力は普段と同じように形(結果)に現れる、そのように信じて疑わなかった。そのことは、若い士の「はなばなしい武者ぶり」を見た時の「自分の形だけすらこれほどの力をもっているということに、かなり大きい誇りを感じていた」という新兵衛の在り様にはっきりと表れている。

ところが筒井順慶の兵にとって黒皮緘の冑と南蛮鉄の兜を身に着けた武者は「槍中村」でも「さきがけ殿」でもない。普段であれば猩々緋の服折と唐冠纓金の兜を見ただけで、そこに「槍中村」「さきがけ殿」の実力を認め、怯んでしまうが、今回はそれが無い。すでに述べたように、人間は形から入る外はない。冑兜という外見から、功名という外形、さらに実力という内なる形を認識する。そうしてそれに基づいて行為する。こうした行為の仕方しか取れない。今回はそうした形がない。恐るるに足らず、ということになる。

当然のことであるが新兵衛にとっては「いつもとは、勝手が違っている」ことになる。まして「猩々緋の『槍中村』」(その実は「若い士」)に、敵陣の兵が「突きみだされた恨みを、この黒皮緘の武者の上に復讐せんとして、たけり立っていた」ともなれば、「どの雑兵もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮」するのは当然である。

「新兵衛は必死の力を振るった。平素の二倍もの力さえ振るった。が、彼はともすれば突き負けそうになった」。ここで新兵衛の内なる実力に対する信が挫ける。形のないものに直面する。必然形のあるものにすがろうとする。「手軽に兜や猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめる」。形への囚われによって戦いへの集中が途切れる。その隙を「敵の突き出した槍が、緘の裏をかいて彼の脾腹を貫くことになる。これは偶然ではない。

これまでの功績が自信という内なる慢心を生じ、内なる形あるもの（実力）に依存する。このことは人間にとって避けがたい。そうした慢心が挫かれる時、他の形あるものに縋りつこうとすることも人間には避けがたいことである。新兵衛は形のない本来の自分に怯んだのである。新兵衛の死は必然であったと言える。それは形あるものに執われざるを得ない人間の姿である。

それと好対照を示すのが「若い士」である。「新兵衛が守り役として、わが子のようにいつくしみ育ててきた」「元服してからまだ間もないらしい美男の若い士」には普段の稽古の結果からして、新兵衛が持っているような実力に対する自信は持ちようがない。初陣で「なんぞはなばなしい手柄をしてみたい」と言っても自分の力でどうなるものではないのは百も承知である。ただ「あの服折と兜とを着て、敵の眼をおどろかして」みたいだけである。本気で戦うつもりはまったくない。大方、一気に敵陣に乗り込んで、危なくならないうちにさっさと逃げ帰るつもりだったに違いない。真剣に戦う気はないから服折や兜に依存することもない。畢竟この若い士には内にも外にも形に対する執われがまったくない。

若い士は「三、四人の端武者を、突き伏せて、またゆうゆうと味方の人へ引き返」す。しかしこれは敵方の武者が猩々緋と唐冠を恐れ、その中身と思われた「槍中村」を恐れたからだけではない。本当に強かったのである。争う気を発する相手に対して人間は戦うことができるが、争う気のまったくない相手に対して人間はどうしていいか分からないからである。若い士はまさに強さなどはどうでもよく、ただひたすら相手が驚くのを見るのを面白がっていただけなのである。こうした相手を前に、むしろ武芸の心得のある武者ほどなすすべを知らない。

実力とは形のないものである。形なきものの威力が実力である。そこには力とその発現の区別も、内と外との区別もない。実力は個人のものではない。若い士の場合は、形なきものの威力（実力）が、形への囚われのない若い士を通して働いたにすぎない。これを若い士の「本来の自己」の実力の現われと言ってもよいが、そう言ったとたん我々はそれに執われているのである。

人間は言葉によって生きる。言葉は人間である。言葉は形なきものと形との間にある。その間に隙間はない。言葉は形なきものを志向し、それを源として形を生み出す。三角形という言葉（音）や文字そのものに意味はない。しかしそれはそれがそこから生まれたった形なきものを志向する。

形なきものは考えることもできない。我々が三角形を考える時は必ず一定の形を思い浮かべなければ考えることすらできない。形から形なきものを考えざるを得ない。人間はそこに言葉の意味を見出す。それが形となった内なるものである。しかしそれはすでに人間にとっての形なきものに過ぎない。それが思惑、所謂理解である。人間はこうした思惑によって言葉の理解を行う。これが分かるということである。それ以外に分かり様がない。

人間が言葉を発する時、言葉を理解する時、直ちに形あるものへの執着が起る。それがなければ意味すら生じ得ない。これが言葉を通じた意味の実体化である。その意味は自分が存

在する意味と一つになっている。しかし言葉はそうした一定の意味を越えて自らの源泉である形なきものを志向している。それ故、人間が言葉を発し、言葉を理解する刹那、人間は言葉なきもの、形なきものへの問いへと常に差し向けられているのである。形すなわち言葉はつねに形なきもの、言葉以前を指し示しているのである。

こうした言説のすべてが形あるものの中で行われている。人間は形を一步も出ることにはできない。しかしそのことはつねに形なきものがいれば図に対する地として厳然として届いていることを意味している。人間とは形なきものと形あるものとの間の存在である。

■「形」菊池寛 を読んで 覚書 2021年11月22日(田中克典さん)

1. 内容の整理

- (1) 登場人物 中村新兵衛 若士 敵の軍勢
- (2) 形 ①猩々緋の服折・唐冠纓金の兜 ②黒皮緘の鎧・南蛮鉄の兜
- (3) 戦況
新兵衛+①→無敵
若士+①→無敵?
新兵衛+②→敗戦

2. 敵の軍勢にとって何が脅威だったのか

新兵衛ではなく、①だった。

しかし、その①は、単なる①ではなく新兵衛の技量によって形作られ、かつそのことが戦場に於いて認証せられた①だった。

ところが、そのような形は、時として、その技量を作り上げた者(新兵衛)から独立して価値を生み出す。

それゆえ、たまたま①をまとった若士の凱旋を許した。敵の軍勢は、若士のまとった①を、新兵衛の技量を併せ持った①と信じ込み、脅威を感じ、若士の凱旋を許したのである。若士を新兵衛と勘違いしたかどうかは問題ではない。若士が、①をまとったことで、従前以上の技量を発揮したわけでもない。

3. なぜ、新兵衛は敗れたのか?

形を理解していなかった。新兵衛が、①という形と、自らの鍛錬による技量とを併せ持つことで、戦場において一定の評価を作りあげたことを忘れていた。

②という形は、いまだ新兵衛の技量を併せ持つところには至っていなかった。②は、戦場では、陳腐な形でしかなく、敵陣にとって何らの脅威でもなかったのである。

4. 若士のこれからと作者の意図

このことについては、この小説では直接には触れられていない。しかし、新兵衛の討ち死には、若士の今後への警告ではないか?

一度は、新兵衛の技量によって作られた形をまとうことで戦場で凱旋できた。しかし、この形を自らの技量を併せ持った形に作り上げ、戦場での認識にさせていかなければ、それは、②をまとった新兵衛と同様なもの、戦場での陳腐な形になり下がる。

このことが、作者の意図ではないだろうか・

5. 私見

人が、社会に於いて一定の評価、地歩を築くためには、それなりの努力が必要であろう。ただ、それが、何らかの形に顕れたものが求められるのだろうか？新兵衛のまとった猩々緋の服折・唐冠纓金の兜は我々にとって何を意味するのだろうか？それは、いわゆる「権威」のようなものなのだろうか？そうであるならば、必要性を感じない。この点はこれから考え続けたい。

■T・Tさん

菊池寛の「形」を初めて読んだ時、やっぱり見た目とか評判とかは大事なんだな、という皮相な感想しか浮かばなかったのですが、ラストシーンでは何か左脇腹あたりに冷やりとした感触がありました。2回の読書会では村上先生のガイドによって、その感触の正体にまで導いていただいた気がします。

「実力」とは何か？という村上先生の問いかけに対し、まずは

「狭義の実力」 + 「形」 = 「真の実力」

と考えてみました。佐野先生がいきなり「すべては形で、実力というものはない」とおっしゃったのに驚きましたが、さらに考えているうちに、確かに「形」を離れた「(狭義の) 実力」はないのかも、と思い至りました。すると、「狭義の実力」 = 0 ですから、

「形」 = 「(真の) 実力」

となります。「すべては形」ということがこの等式のことを意味するなら、私もそのように思います。また、「すべては実力」と言い換えることもできると思います。

新兵衛の「実力」とは戦いにおいて立ち現れるものであり、だとすると猩々緋と唐冠のときの強さ、黒皮緘と南蛮鉄のときの強さのいずれも、新兵衛の「実力」であるということになります。

身に着けるものは交換可能であるために、「形」と「(狭義の) 実力」を分けて考えたいくなりますが、しかしこれを例えばレーシングドライバーの「実力」に置き換えて考えてみたらどうでしょうか。レーサーの「実力」はレース成績で測れるものですが、「形」 = レーシングカー、「(狭義の) 実力」 = レーサーのドライビング技術、とするのは単純すぎます。レー

成績は個人のドライビング技術だけでなく、良いレーシングカーを作れる強いチームに所属できるかどうかにも左右されますし、チームの一員としてレーシングカーの進化あるいは最適化にどれだけ貢献できるかも重要であると聞きます。レーサーの「実力」は、車自体の出来不出来、所属チームの経験や能力や資金力、個人の技術や体力や知力や人間関係構築力、天候や運といった多くの要因に左右され、常に変化するものです。そこでは「形」と「実力」は不可分と考えた方がよさそうだと思います。そして、新兵衛にとっての武具はレーサーにとっての車に相当し、「形」の一部であると同時に「実力」の一部であると言えるのではないのでしょうか。

それでは、新兵衛の敗因は何だったのでしょうか。

「形」を離れた「(狭義の) 実力」という思い込みから逃れられなかったから、ということになるかと思いますが、そもそも何故自分に「(狭義の) 実力」があると思っただけなのでしょう。逆に、猩々緋と唐冠を借りた若侍には何故そのような思い込みがなかったのでしょうか。

新兵衛にあつて若侍になかったものは、成功体験とそれによる自信です。それだけならさして悪くはないのですが、ここで新兵衛は「自分＝強い」として思考停止しており、この思考停止が新兵衛の敗因だと私は考えました。人はいったん強さを手にすると、その強さと一体化したくて不変の「自分＝強い」と見なしがちなのかもしれない、その強さも移り変わり容易に失われる「形」の一つであることを認めたくないのかもしれない、と思いました。新兵衛は、「形」とともに強さが失われた結果絶体絶命となって初めてその思い込みに気付いたのですが、遅すぎました。ここまで劇的にあっさりと「形」＝「実力」が失われた様は痛々しく感じられました。この痛い気付きが私自身の気付きとして、左脇腹に冷やりと感じられたのだと思います。

■菊池 寛「形」読書会の感想文 2回分(岡部昌平さん)

【10月16日の感想】

形而上的な「形の優位」を書いたというより、古文書をリライトした手法そのものが内容で、それ以上ではない結論に落ち着いたが、それは文学だろうか？

形の優位を書くのであれば若武者の活躍だけでことたりており、中村の二番槍も討ち死も必要がない。あと2枚ほど字数を増して武者としての引き際を悟った槍中村の心理を描き、若武者にあとを託して「形」を捨てて敵にむかうその場面で小説を終わることでテーマを維持したまま、読み手により深い考察を呼ぶはずである。その際、若武者を「妾腹」ではなく「継室」の子にすることで、字数を割いて中村の心情を描写しなくても読者には多くが伝わる。

通常なら体に矢傷がいくつあるとか、戦場でのエピソードを織り込んで中村の人となりを滲ませるところが、すべて省略して兜と陣羽織に象徴させて人間性を描いていない。時代めいたいいまわしが格調高くもあるが、登場人物の性格付けはコメディにできそうなステレオタイプな若武者と豪傑になっている。携えた三間槍はアニメ級のデフォルメである。際立たせるための仮構にしてもカリカチュアな内容と文体とのズレが常に気になる。

ところで、このアイデアは特別なものだろうか。小説のもとになった文書は事実だけを端的に記しており、作家はむしろそこに脚色をくわえている。さらに割り切った「形」が作品以前に存在していたのだから、この作品の創作性をおもいきった仮構にみると、評価の方向が逆になってしまうのではないか。そこでは作家と読者は分断されており、すべてが(作られた)舞台で展開する。作風として「コンセプチュアル」であり、哲学的かもしれないが、それが文学的なことなのか考えさせられた作である。

【11月13日の感想】

伝統的な書き口をとりながら、ドライなまでに心理描写を排除し、現代的な哲理で貫いてみせた—それが「文学」的なかっこよさであり、通俗的な英雄譚はふるくさい…との論も分からなくはないが、そのような対比こそふるくさくないか。人間を描かかず、哲理を述べる「文学」の寒々しさを感じる。

このモチーフは、若者に「かたち」を託し、黒革緘の平凡な武人として自らの生涯を戦場に閉じた名もないモノノフの生きざまを焦点することで「すべては形」から「すべては内容」に転換できる。「形」はかたちであって、かたちにあらず。読書会でNさんがいいかかったのはそんなことではないか。対話を聞いていても、そもそも文芸たりえていないのに文学でありうる「文学」の病んだ情況をみる気持ちに変化はなかった—

ところが…である。

読書会の終わりに参加者の口からでた「わたしって何だろう？」の発言は、ことばに芯があった。発言した人が(おそらく)その問いの直中にある、心からの読みである。それに応えるように「ひとは過信しないでは生きていられない」との村上先生と佐野先生のことばがあり、その「なぜ」は虚構のなかの真実に達してひびいた。

そうなると話はすこしちがってくる。人間を「かたち」だけで描く作為が、作為を突き抜けて人間を射抜いてしまったことになる。デフォルメがきつすぎて作為に堕ちていると思ってきたが、そこを超えてきた人がいて、さらにその「問い」には真実も現在もある。これは、ぼくの感想をくつがえす痛烈な批判であり、カウンターパンチを食らって2ラウンド終わりでダウンを奪われてしまった。これが村上読書会の怖さかもしれない。

■ 『形』は形だけか（奈原伸雄さん）

短編を読んで語らうユニークな読書会。菊池寛の『形』の朗読を聴いて、そろっとスルーしようと思っていたら、「形」より前にまず「実力とは何か？」と突かれたので面食らった。「実力に形をプラス・マイナスしたようなものでしょうか」などと中途半端な受け答えをしているうちに、終盤にかけて、「(勝敗を決めるのは) 形こそすべてであり、実力というものはない」という見方が、やゝ唐突な感じで浮上してきた。「そんなはずはなかろう」というのが、この極論に対する最初の直観である。瞬時に相当な思考回路を巡らせても、この実感は変わりそうもない。形をつくるのも、洞察するのも、錯覚するのも、「実力」が物を言う。

そんなことがあってか、後日この作品を収める新潮文庫の「解説」について目が留まった。吉川栄治が昭和23年3月に記したとの由、関連部分の論調は至極シンプルで、『形』は、多くの教科書に採られていた。内容も大切だが、「形」も大切だというテーマである（傍点筆者）というもの。この余りの簡潔さは、早くも勝負を決める。すなわち、「実力も形も大切」という考えを基に、「実力だけで決まるものでもない」、「形も大切」という文脈から、「形だけ」で勝負が決まるいわれはない。

しかし、この話しには入り組んだ続きがある。日経新聞の「春秋」というコラムによると(2019年6月2日)、新潮文庫のあの「解説」は、実は吉川栄治の名を語って「菊池本人が書いたという」。その筋では有名な話と見えて、どうしてそんな手の込んだことをするのかと詮索し始めると、先回りしたように飛んで来るのが、「作品のどこにそう書いてある?」「タイトルにも本文にも、書いてあるのは形だけだ」という追求。こうした場合、ほとんど咄嗟に出てくるのは、次のような苦し紛れの応えしかない。曰く、「どこにも書いてない。故に、至る所に書いてある」と……。

よくよく考えてみると、これは論理の破綻のようであり、この作家には十分以上に通用しそうである、現に、こんな仕掛けまで施してメッセージを送るくらいだから。因みに、吉川が「解説」を書いたことになっている「昭和23年3月」に、菊池は死亡している。この月の6日まで生きて、残余の20数日間以降はこの世にいない。『形』という作品は、極めつきの短編であることが象徴するように、人間のほかない「生」の、その僅かばかりの「形だけ」を切り取って、「無形」の「死」の上に張り付けたような結果になった。

「作家は死んだ。残るのははいよいよ作品と読者だけだ」というテーゼが絵を書いたように実現した。しかし、事の顛末は、「作品」を「活字」という「形だけ」にはしない。「読者」は活字の単なる「解読機械」にもならない。「死せる菊池」は、そのような論法の粗い網目を難なく抜ける、その芸当そのものが本当かどうかの真相さえ韜晦して。これはまさに戦国の「影武者」の上を行く戦法であり、結局どれが影でどれが本物か解らない。表向きには凡庸の限りを尽くして、陽動(フェイント)と隠蔽(ステルス)と、有と無との矛盾的な媒介を試みる、この困難なテーマに賭ける作家の執念を見るのみである。

その意味で、先に引用した日経のコラムの結語も浮薄である。「企業統治も、まず形をつ

くらないと始まらないことも確かだ」云々。これまで、コンプライアンス（法令遵守）が、情報セキュリティが、BCP（事業継続計画）が、時の掛け声とともに、現実離れた繁文と大掛かりな組織建てに疲れた「形」を堆積し、その割には実効性が希薄な事実を反省し自覚することなしに、形だけつくっても始まらない。

■他者としての「自分」との出会い(村上林造)

はじめに

菊池寛「形」（大正9年1月「大阪毎日新聞」）は非常に短だけでなく、内容的にも極めてシンプルな小説である。戦国時代、「五畿内中国に聞こえた大豪の士」であった侍大将中村新兵衛は、戦場でいつも身に着けている「火のような猩々緋の服折」と「唐冠纓金の兜」という自分の「形」をうっかり若侍に貸したことで「強さ」を失い、あえなく戦死してしまうという話である。どんな外見をしていても武士としての実力は不変だろうという読者の常識を裏切り、外見（「服折」や「兜」）が彼の強さを左右してしまうという意外な結末が読む者に衝撃を与え、そこから実生活における「形」の働きやその力についていろいろと考えさせられる小説である。

この作品は中学校の国語教科書に取り上げられていて、授業実践報告がいくつもあるようだ。その一つを見ると、「作者が伝えたかったこと」として次のような答えが生徒から寄せられたという。

- 形の強さに頼り、おのれの力を過信した人間の愚かさ。
- 形さえあれば実力がなくてもいい。
- 人や他人を見る時に外見の「形」だけで評価せず、中身をちゃんと見て評価すべき。
人は外形によって左右されてしまう。
- 形が人の心を大きく左右すること。
- ある一つの形にとらわれた人々の姿。
- 見た目よりそれを見た人は大きく影響される。

これらを見ると、「おのれの力」「実力」「中身」と対比して、「形」「外見」「外形」「見た目」が人に与える影響の大きさを指摘する意見が大勢を占める。そこから、だから「形」を大切にすべきだという方向に行くのではなく、逆に「形」などには左右されず「実力」を重視すべきだという授業の方向性が見てとれる。そのうえでさらに、社会において「形」に当たるものを問かけると、「一般社会での学歴、肩書、ブランド、人種差別、男女差別など

の問題にまで発展して考えられていた生徒も多くいた」¹とのことである。確かに社会的な地位や名声、職業や学歴等といった「形」（「外見」）にあたるものが、人にチカラを与えることが多々ある。実例として、「実力はあるのに、学歴がないから出世できない」とか、「たいした力もないくせに、親の七光りで威張っている」、「相手が高段者だと、それだけでどうしても気後れしてしまう」とかいう話は世間に少なくない。この小説は、そのような「形」のもつチカラを印象的に描いた作品といえる。

それでは、「形」（外見）と対をなす新兵衛の武士としての「実力」（中身）はどうだったのか。彼は「形」に助けられていただけで本当は弱かったのだとか、昔は強かったとしても名声があがると修練を怠り弱くなったのだとか、さまざまに想像する余地はあるが、その根拠にあたることは何も描かれていないから、それらは読者の想像にとどまる他ない。小説「形」はその題名に忠実に、新兵衛の実力そのものには関心を示さず、「形」だけに関心を集中するのである。「形」の原典は『常山紀談』の「松山新助の勇将中村新兵衛が事」だが、作者菊池寛はそこに含まれていた、形とは別に新兵衛の強さを示す部分（羽織と兜を身につけていない状態で「中村戈を振て敵をころすと許多」）を削除した²。そのことによって、新兵衛の「実力」がどうであったかという問題への通路は閉じられ、羽折と兜という「形」の機能のみを強調することで、小説「形」が成立したのである。

1 記号機能としての記号表現と記号内容

実力と形の関係とは内容と形式の関係であるから、内容にアプローチしようとするれば、それ単独で考えることは不可能で、あくまでも形式との二項関係の中で考えなければならぬ。そして、〈内容／形式〉の二項関係とは、対象に意味を与える記号の基本的メカニズムである。記号における二項（〈記号表現／記号内容〉）の機能について、池上嘉彦は次のように説明している。

あるものが別のあるものの代わりとしてそれを表している時、そのはたらきは「記号機能」、そしてその働きを担っているものは「記号」と呼ばれる。(略)必ずしも「記号」がもともと存在しているのではなくて、当事者が自らの主体的な判断に基づいて、あるものが別のあるものを表している（つまりそこに「記号機能」が存在している）と認定する。その瞬間にそのものは「記号」となる。(略)このやり方で、人間は事実上すべてのものを「記号」にすることができる。人間はすべてのものにことばを与えることので

¹ 三根直美「文学作品における読みの探求——『形』（菊池寛）の場合——」（「広島大学中・高等学校中等教育研究紀要」第62号 2015）

² 『常山紀談』には「……羽折は猩々緋鬘は唐冠金纓なり、敵これを見てすはや例の猩々緋よ唐冠よとて未戦はざる先に敗して敢てむかひちかづくものなし、或人強て所望して中村与之、その後戦場にのぞみ敵中村が羽折と盔とを不見、故に競ひかゝりて切崩す。中村戈を振て敵をころすと許多なれども中村を知ざれば敵恐れず。中村つひに戦没す、依之曰く敵を殺の多を以て勝に非ず、威を輝して気を奪ひ勢いを撓す理を曉るべし」とある。(傍線引用者)

きる創造主なのである。³

記号機能とは「あるものが別のあるものの代わりとしてそれを表す」という代理表象の機能なのである。人間が記号（ことば）を手に入れたことは、目に見える現象（記号表現）の中に目に見えぬある意味（記号内容）を見てとることによって、「事実上すべてのもの」を認識する道を開いたということである。確かに人間は、さまざまな文化領域において、記号を通して具体的なものに意味を与える。例えば、日常生活において人の服装や持ち物、しぐさ、表情、話し方等あらゆる振舞いの中で社会的文化的な意味を表現する。また、人類の文明とは自然現象の中に様々な宗教的、科学的な意味を見て取ることであり、科学の進歩とは自然の中に新しい意味を発見しつづけることに他ならない。人間は記号的意味で満たされた文化的テキストの中に生きるのである。記号の最たるものは言葉であるから、それは人間が「すべてのものにことばを与えることのできる創造主」であるということでもある。

小説「形」についていえば、敵味方の武者が「火のような猩々緋の服折」と「唐冠纓金の兜」の中に中村新兵衛の実力、強さを感じていたというのは、記号が文化的文脈の中で機能する一例である。それだけではない。彼は「五畿内中国に聞こえた大豪の士」であり、「畿内を分領していた…大名小名の手の者で、『鎗中村』を知らぬ者は、おそらく一人もなかった」という。「大豪の士」とか「鎗中村」とかいう呼称（言葉）もまた記号表現に他ならない。池上嘉彦の表現を使うなら、「必ずしも『記号』がもともと存在しているのではなくて、当事者が自らの主体的な判断に基づいて、あるものが別のあるものを表している（つまりそこに『記号機能』が存在している）と認定」されたら、それは「記号」であり、逆に誰も意味を見出さなければ、それは「記号」ではないのである。

以上のように見れば、記号表現と記号内容は決して別個に独立して存在しているのではなく、表裏一体の「相互依存の関係にある」ことがよくわかるであろう。だがさらに、池上は「記号の二つの側面のうち、『記号表現』の方がわれわれにとって何らかの形で知覚できる対象であるのに対して、『記号内容』のほうは必ずしもそうではない」、「記号表現の方はすぐ『目につく』記号の側面であるから、それは容易に『記号』そのものの存在と結びつき、『目につかない』記号内容の存在を暗示する」と述べて、「記号の二つの側面の間の関係」の「非対称」性に言及している⁴。要するに、記号表現が人の感覚に捉えられる「目につく」側面であるのに対し、記号内容はそれによって「暗示」される「目につかない」側面なのである。そのため、記号内容が「わからない」場合も、人が「それを『記号』として受け取ることに大きな抵抗はない」のに対して、「逆に、『記号内容』らしいものだけがあって『記号表現』を伴わない場合、それを『記号』として受け取るなどということは想像し難い」⁵と

³ 池上嘉彦『記号論への招待』（岩波新書 1984.3）67～68 頁

⁴ 注3に同じ。69～70 頁

⁵ 注3に同じ。70 頁

いう。

このことを、「形」にあてはめてみればどうなるだろうか。新兵衛の場合、記号表現である「服折」「兜」「大豪の士」「鎗中村」と、記号内容である彼の強さ、実力は切り離せない相互依存関係にあるが、記号表現が常に「目につく」（「知覚できる」）のに対し、記号内容としての彼の實力（強さ）は、それによって「暗示」されるだけの「目につかない」ものである。両者は切り離せないから、もし記号表現である「猩々緋の服折」「唐冠纓金の兜」が失われたら、それが表す記号内容が同時に消失するのはいうまでもない。池上嘉彦は『記号内容』らしいものだけがあって『記号表現』を伴わない場合、それを『記号』として受け取るなどということは想像しがたい」と述べたが、もし小説結末で、「服折」と「兜」をもたない新兵衛が「強さ」を失わなかったら、それこそ「想像しがたい」ことと言わねばならない。

これに対して、実際は強い武士は何を着ていても強いはずだという「現実的」な反論があるかもしれない。しかし、現実とは無数の記号表現（形）が同時に交錯し、輻輳する場であり、「形」はそこで生じる無数の記号の働きを、「服折」と「兜」という単一の記号に代表させたことによって、現実における「形」の機能を典型的に表現したのである。もしそういう方法をとらなければ、黒革緋の新兵衛が雑兵に突き殺されるという出来事から「記号表現を伴わない記号内容のありよう」を端的に示すことは不可能だったはずである。

だが問題はここで終わらない。なぜなら、内容と形式は切り離し得ない相互依存関係にあると言いながら、実のところ、我々は両者を切り離してしか考えられないからであり⁶、むしろ問題はここから始まるのである。

2 主体的自我による他者の客体化

新兵衛は、自分の「形」である服折や兜を若い侍に貸しても自分の本質である強さには何の影響もないと考えた。彼には、「形」である服折や兜がなくても自分の強さは独立した実体と思われていたのであろう。そのことは、若侍から「服折」と「兜」を貸してほしいと頼まれた時の彼の言葉の中にはっきり示されている。彼はこう言う。

「が、申しておく、あの服折や兜は、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたが、あの品々を身に着けるうえは、われらほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ」

彼にとって、「服折や兜」は表面的な「形」にすぎず、重要なのは「肝魂」であり、それこそが彼の誇りだったのである。

だが、そういうふうを考えるのは新兵衛だけではないだろう。むしろ、何を着てしようと

⁶ 我々が、本来切り離し得ない相互依存関係の二項を個別の実体としか考えられないのは、〈夜／昼〉〈男／女〉〈右／左〉〈夏／冬〉〈表／裏〉等を考えればよくわかるであろう。

「私は私だ」と考えるのは、我々にとってきわめて一般的な考え方である。我々は、「中身」を「形」から切り離して独立で考える考え方に強く縛られているのである。また本論の冒頭で見た中学校の授業では、生徒達から「形の強さに頼り、おのれの力を過信した人間の愚かさ」、「人や他人を見る時に外見の『形』だけで評価せず、中身をちゃんと見て評価すべき」等の意見が出たという。これらはいずれも「形」と切り離された「中身」を人の本質と見る考え方である。要するに、自分の強さを実体化していた新兵衛と現代読者は、記号内容を記号表現から切り離し、それを独立した実体と考える考え方において深く共通しているのであり、だからこそ「形」が失われたら「中身」である実力も同時に失われるという「形」の結末が衝撃的なのである。

以上のようにみれば、小説「形」は、本来代理表象にすぎない記号内容をともすれば実体的に対象化する人間の認識構造に光を当てた小説であるといつてよいだろう。だがそうであれば、この小説は、さらに人間における認識の限界について、さらに深い問題を提起しているのではないだろうか。

記号機能が、あるカタチ（記号表現）の中に意味（記号内容）を見て取る代理表象の機能である以上、人の認識が対象そのものに到達することはあり得ない。新兵衛は、自分の「真の実力」を知っているつもりであったが、彼が認識できるのは、動き続ける身のこなし、一瞬一瞬の間合い、表情等の現象（形）以外のものではない⁷。つまり、人は「実力」そのものを認識も理解もできないし、そういうものが「ある」かどうかもわからないのである。語の定義として「人が絶対的に理解できないもの」を「他者」と呼ぶなら、内容としての実力は、人にとって他者というほかない。新兵衛自身が自分の実力に揺るがぬ自信を持っていたのと裏腹に、彼の「実力」は彼にとって「他者」だったのである。

以上のように見てくれば、その新兵衛が無名の「黒皮緘の武者」として敵の雑兵達と戦うシーンは、彼が他者としての自分自身に直面させられる場面と読める。その様子は次のように語られる。

新兵衛は、いつもとは、勝手が違っていることに気がついた。いつもは虎に向かって羊のようなおじけが、敵にあった。彼らはうろたえ血迷うところを突き伏せるのに、なんの雑作もなかった。今日は、彼らは戦いをする時のように、勇み立っていた。どの雑兵もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮した。二、三人突き伏せることさえ容易ではなかった。敵の鎗の鋒先が、ともすれば身をかすった。新兵衛は必死の力を振るった。平素の二倍もの力さえ振るった。が、彼はともすれば突き負けそうになった。手軽に兜や猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめたときであった。敵の突き出した鎗が、緘の裏をかいて彼の脾腹を貫いていた。

⁷ 形式と内容（現象と意味）の関係については、「空即是色 色即是空」の「即」が参考になろう。そこでは、形式はそのまま内容であり、現象は同時に意味であるとされ、それは、相対と絶対の関係にも敷衍することができる。

「平素の二倍もの力さえ振るった」にもかかわらず、新兵衛は「ともすれば突き負けそうにな」る。その時、彼は、いったい何が起きているのか、自分が何と戦っているのか、理解できなかつたに違いない。なぜ彼らはこれほど強いのか、なぜ自分はこれほど非力なのか。彼が戦っているのは既知の存在だった雑兵達とは異なる何者かであり、それと戦っている彼自身もまたかつて見知らぬ自分であった。それはつまり、新兵衛が、他者としての雑兵、他者としての自分に出会ったということに他ならない。ここで見落とせないのは、この時、〈主体／客体〉、〈自我／対象〉の二元的関係そのものが安定性を失っていることである。そもそも主体とは客体（対象）を措定し得る安定した中枢性を確保しているからこそ「主体」なのだが、他者＝「絶対的に理解し得ぬ何者か」という定義に立ち戻るならば、その定義からして、「他者の前に立つ主体」はその能動的主体性を手放さざるを得ないからである。そのように見れば、新兵衛がここで戦死するのは、客体を措定する主体的自我の死を象徴するできごととも読めるのではないか。⁸

以上の論旨をさらに展開すれば、人が他者としての自己に触れるには、自我の主体的安定性を失う必要があるということにもなりそうなのだが、そのことに論及する前に、そもそも主体的自我としての「私」とはどういう存在であるのかについて見ておく必要がある。これについて内田樹は次のように述べている。

人間存在の独自性は、「私は私である」という同語反覆によってではなく、「私は…で生きている」という「他なるもの」への依存、他なるものの享受という仕方では確保される。「私」は「非一私」を享受するという機能においてはじめて「私」なのである。⁹

内田によれば、「私」が「非一私」つまり「私ならざるもの」を「享受する」とは、それを「絶えずおのれの内に繰り込み続ける」ことであり、彼はその「運動性こそが私の本質をなしている」と言う。しかし「私」がつねに「私ならざるもの」を「おのれの内に繰り込み続ける」とすれば、「私」とは「自分の周りのすべてのものがすでに自分の所有物としての刻印を受けている、『私のもの』に埋め尽くされた世界で生きている」ということになる。そのことを、内田は次のように端的にまとめている。

そのように孤立してあること、そのように閉じられてあることは、自我の属性の一つではなく、自我の本質なのである。¹⁰

⁸ 内田樹は、他者と対面した「主体」のありようについて、「それまで享受していた安定的な中枢性を手放してしまった主体、無底の空間に投げられた主体」と表現している。（『レヴィナスと愛の現象学』文春文庫 2011.9 94頁）

⁹ 注8に同じ。187頁

¹⁰ 注8に同じ。189頁

本論では先に、「人間は事実上すべてのものを『記号』にすることができる。人間はすべてのものにことばを与えることのできる創造主である」という、記号と人間の関わりに関する池上嘉彦の論を紹介した。ここで内田樹は、「記号機能」が人間を「創造主」にするメカニズムを、人間における、「私」と「私ならざるもの」の関係を問題にする文脈の中で取りあげているのである。彼によれば、人の自我は、「あらゆる非-自己をただ享受の対象としてしか認識することのできない、徹底的にエゴイストな自我」であり、そのような強力な自己同一性こそ「自我の本質」であるというのである¹¹。

内田の説明に従えば、人間は、どんなに意識的自己反省を重ね、「真の自己とは何か」について深い思索に沈んだとしても、それを通して他者としての自己に出会うことはあり得ない。なぜなら、主体の思惟を通じて客体を認識、理解しようとする営みは、「私ならざるもの」をどこまでも「おのれの内に繰り込み続ける」プロセスをたどるだけで、それは結局のところ、「私」の理解を超えた他者を自己化するだけだからである。だとすれば、人が他者としての真の「私」に触れるためには、「安定的な中枢性」を保持した主体的自我が言葉の代理表象によって対象を理解するという思惟的認識のプロセスとは異なる経路をたどる必要があることになる。平たく言えば、ここでは、頭で考え、理解するというプロセスでは開くことのできない地平が問題になっているのである。

3 他者としての自己との出会い

問題は、言葉を使って考えるというのと異なる仕方とは、どのような仕方なのかということである。一言でいえば、それは「考える」のではなく、「体験する」ということである。ここで、中村新兵衛が、無名の「黒皮緘の武者」として敵の前に立った時、彼は他者としての敵に出会い、同時に他者としての自己に出会ったことを思い出したい。「火のような猩々緋の服折」と「唐冠纓金の兜」を人に貸し、あえなく戦死してしまったことは、彼には命を賭けた一回限りの体験であった。彼はその時、他者としての自己に直面し（させられ）、その痛みを自分の身体で引き受けさせられた。人には確かにそういう痛切な身体経験をを通して、真の自己に触れるということがあるのだろうが、それはもちろん戦国武士の戦いに限られるものではない。ここで論者が取り上げたいのは、それが小説や詩を読む文学体験の本質でもあるということである。

文学体験において、読者は自身の人生経験から構成された人間観と芸術観（人間とは何か、芸術は人間をどう表現するか）を基準に作品を読み、それへの評価を下す。その時、読者は読書主体として「私ならざるもの」である作品を対象化し、「おのれの内に繰り込み」、自己化するのである。しかし、もしそこで読者が「他者としてテキスト」に直面したとすれば、読者とテキストの主客二項は解体され、読者は主体的自我の「安定的な中枢性」を失い、他

¹¹ 注8に同じ。190頁

者としての自己に直面させられることになるはずである。だがそれは、具体的にはどのような出来事なのか。その具体的一例として、大学一年生の「形」レポートを次に引く。

読み終えたとき何とも表現しがたい感動に襲われる作品に私は出会った。それは菊池寛の『形』という作品だった。まさに自分の人間観が覆されるというような感覚であった。誰かが他人を認識するとき、それはあらゆる出来事の偶然の積み重ねが形成した仮想にすぎない。しかしこの仮想は大抵「事実」として受け止められ、「事実」とすることを疑う人は誰もいない。私はてっきりこの現象はあくまでも〈自分〉と〈他者〉、〈人〉と〈人〉との間で起こるものであると思っていた。しかしこの現象は〈自分〉と〈自分〉との間でも起こっていたのだ。〈自分〉で〈自分〉を「認識する」というようなことを意識したこともなかったし、自分はこういう性格でこういう力を持っていて……そう考えることすべて「事実」として疑ったことがなかった。本当はただの仮想にすぎない自分に対するイメージを、もし誤解したまま認識してしまったら、私も『形』に出てくる新兵衛と同じだ。信じて疑わないからこそ、見誤った認識であったと気付いたときには「時すでに遅し」であるということに気付いたときハッとさせられる思いだった。そして〈自分〉の〈自分〉に対する認識に殺された新兵衛の姿が頭にこびりついて離れなかった。そしてこれまで自分が悩んできたことがどれだけ小さなことであったか、認識にとらわれすぎて見える世界がいかに狭くなっていたかを知った。文学作品を通して自分自身の内面に目を向け、そしてこれまでの生き方について考えるという経験がもたらす影響はとてつもなく偉大だった。

身体全体で文学作品を読む、これは経験した人にしかわからない感覚だ。実際わからないまま、というよりは知らないまま私は大学生になってしまい、貴重な体験をみすみす逃してしまったことを悲しく思う。しかし今、生徒を問いの前に立たせてあげたい、そしてそこから初めて見える世界に感動することで生徒の内面や生き方に光を照らせるような授業がしたいという熱意でいっぱいだ。今の私には到底できっこないけれど、いつかこの目標が達成できるように、目標のまま終わらないように、本当の意味での「勉強」をこれからの大学4年間で私は頑張りたいと思う。

大事なのは、彼女はここで自分の作品への「理解」を述べているのではなく、自分の「体験」を語っているということだ。レポート要旨だけをいえば、自分についての人間の認識はすべて「ただの仮想」にすぎないということであり、そのことは本論においても、記号機能の説明を通じて繰り返し述べてきたところである。では、彼女がレポートで述べていることと、論者が本論で述べてきたことは同じなのかといえば、もちろんそうではない。本論はそのことを論理的概念的に説明しただけであり、それは頭で考えれば理解できることだ。それに対し、彼女が述べているのは、その衝撃を自分の身体に受けた痛みの経験であり、「形」を読めば誰でも経験できるというものではない。彼女自身、これまで「認識にとらわれすぎて見

える世界がいかに狭くなっていたかを知った」と言い、それに「気付いたとき」の「ハッとさせられる思い」について、「これは経験した人にしかわからない感覚」だと述べている。確かにその時、人は、雷に打たれたように目から鱗が落ち、先入観が破壊されて、それまで知らなかった他者としての自分自身の前に立たされる。これは、いくら頭であれこれ考えてもできない経験であり、文学体験のみならずあらゆる芸術「体験」とはこれを指す。それだけではない。多くの芸道や宗教において、入門者が自分の頭で考えることを禁じられ、逆に自意識を去って真の自分自身に立ち戻ることを求められるのも、このことと深く関わっているであろう。それは言葉では説明できない出来事であり、だからこそ芸術体験は言葉を超えた体験であると言われるのである。そしてそのことは、言葉で構成された芸術ジャンルである文学においても変わらないのである。

おわりに

文学作品について、それが「名作」かどうかを一般的に決めることはできない。ある作品から大きな感動を受けた読者にとってそれは忘れ得ない名作となるが、感動しなかった者にはただの文章にすぎないからである。だから何が「名作」であるかは個々の読者によって異なるし、それはそれでよいのである。だがいずれにせよ、人が作品に接する仕方には、頭での理解による「解釈」と身体での経験である「感動」の二つがあり、どちらがより根本的かといえば、それは後者である。もちろん、解釈を通ることで感動に至る場合もあるし、文学教育がそれを目指す営みであることは確認しておく必要がある。また、言葉を超えた文学的感動を、どこまでも言葉の論理と概念を用いて説明しようとするところに文学研究の意義があることは言うまでもない。論者もまた、本論において、「形」が、読者に文学的感動をもたらし得る作品である所以を説明しようと試みたつもりである。